

症例報告

NPPV使用中に腸閉塞を繰り返し，胃瘻による減圧および栄養療法が有用であった慢性呼吸不全の1例

中村 博式，大洞 昭博，加藤 隆弘，宮脇 喜一郎，森本 泰隆，伴 尚美，福田 信宏，小島 孝雄

朝日大学村上記念病院消化器内科

[和文要旨]

症例は腹部手術歴のある 80 代女性。2009 年より肺結核後遺症による呼吸不全にて非侵襲的陽圧換気療法（以下、NPPV；non-invasive positive pressure ventilation と略す。）が導入されていた。その経過中，腸閉塞にて入院。一時的に NPPV を中止したが，高二酸化炭素血症の増悪にて NPPV を再開。今回，腸閉塞が再発し，NPPV を中止し，経鼻胃管による減圧にて一旦軽快。再度 NPPV を装着すると腹部膨満感，吐き気が出現し，腹部単純 X 線上，著明な腸管ガス像を認めたため，経鼻胃管による減圧を継続せざるを得ない状況となった。そこで減圧目的にて経皮内視鏡的胃瘻造設術（以下、PEG；percutaneous endoscopic gastrostomy と略す。）を施行したところ，症状は軽快した。経口摂取も不良であり，胃瘻栄養も併用した。PEG は NPPV 使用中の患者の消化管内減圧および栄養補給において有用であると考えられた。